

博 士 論 文 概 要

論 文 題 目

佐藤功一の「建築－都市」観とその影響に関する  
史的研究

Koichi Satow's View－The Relation  
between Architecture and City, and His Influence

申 請 者

氏 名

米山	勇
Isamu	Yoneyama

専攻・研究指導  
(課程内のみ)

本論文は、建築家・佐藤功一（1878～1941）の「建築－都市」観とその影響について明らかにしたものである。佐藤功一は生涯で 233 の作品を設計したとされる。またその一方で、早稲田大学建築学科の創始者として、あるいは東京女子師範学校（現・お茶の水女子大学）、日本女子大学などにおいて女子教育の先鞭をつけるなど、日本の建築教育の方面でも多くの業績を残している。しかしながらこれまで、佐藤についての論究は、様式主義者、教育者、都市論者……といった多面的な文脈に終始しており、それぞれを総合的に捉えた研究は見られない。

本論文では、既往研究の成果を継承した上で、佐藤功一の残した作品および言説の分析、図面等一時資料の分析、そして現存する建築についての調査を通じ、論考を進めている。まず序論では、既往の研究を紹介した後に、佐藤功一の出自と生涯について論じ、参考資料として佐藤功一の中学受験からその後の学生生活について同級生が綴った日記を引用した。第 1 章では、佐藤功一が「住宅」に対して注いだ視線を重視し、実作の実測調査の成果も踏まえ、彼の「住宅」観を明らかにしている。第 2 章では、彼の作品と「様式」との関係について論考し、佐藤功一の「建築」観の変遷を明らかにしている。第 3 章では、佐藤功一が残した都市美に関する言説と具体的な建築作品を比較参照することにより、彼の「建築－都市」観を明らかにしている。第 4 章では、佐藤功一の「建築－都市」観が、後に与えた影響について、具体的に数名の建築家を挙げ、論究している。

第 1 章「住宅の視点」では、佐藤功一の「住宅観」について、具体的な作品を挙げながら論究した。佐藤功一の住宅観は、住宅における生活の機能的・設備的改善、すなわち換気、照明、採光、防犯、給・排水、空調等の充実といった観点にほぼ集約されるものであった。こうした住宅観が反映された作品としては、比較的初期の佐藤功一自邸（大正 15）、反町邸（昭和 2）などを挙げるができる。一方、昭和 8 年以降になると、住宅の外観に趣向が注がれるようになる。これはおそらく、上記のような住宅観を維持しつつ、日常の生活を営む上で、やはり様々な意匠も欠かせないものであると思いついた結果であろう。またそれと同時に、都市美を構成する要素としての住宅という意識への展開もその理由の一つと考えられる。

このような佐藤功一の、いわば「住宅の発見」は、柳田国男の風景論の影響が大きい。大正 5 年、佐藤功一は民俗学者の柳田国男とともに「白茅会」を発起し、弟子の今和次郎をはじめ、大熊喜邦らとともに、精力的な民家調査を行っている。日本における民家研究の嚆矢である。この柳田との親交、そして後の白茅会の活動こそが、佐藤功一と「住宅」との結びつきに大きな意味をもったと考えられる。柳田国男が「常民」を見出したように、佐藤功一は「民家」を発見した。さらに重要なのが、柳田国男の風景論の影響である。風景を生活としてみるという論理、生活実践のかたちとしての風景を提示する視点、風景に対する自分の感受を生活者の側から捉え直す記述の構築。こうした柳田の風景論が、佐藤功一を「生活実

践のかたち」としての建築、すなわち「住宅」への発見と向かわせたのである。佐藤は「生活」を一義とした住宅論を展開するとともに、女子教育という新たな体系へとその理念を展開させていく。しかし、建築家・佐藤功一にとって住宅は、他のビルディングタイプと独立した固有の体系ではなく、むしろ建築そのものの「原風景」であったといえる。そして晩年に至り、骨肉化した「住宅」への視線は、庁舎建築をはじめとする大規模建築と連関する建築観として昇華するのである。

第2章「作品と様式」では、初期、中期、後期と時代を区分し、建築家・佐藤功一の具体的な作品について分析し、佐藤功一の「建築観」の変遷を明らかにした。佐藤功一の建築家としての生涯は、実質中・後期、すなわち大正8年以降、没する昭和16年までの22年間であった。初期の佐藤の建築観は、古典とゴシックを両軸とする「様式」に強く依拠したものであり、そこに建築家・佐藤功一の「自己」を見いだすことは困難であった。しかし、中期以降、佐野利器が言うような「鋭い直線が通って、角が立って、明暗がはっきりした」特徴（佐藤張り）をはじめとする自由な造形意志が表出され、佐藤独自の作風を形成していく。そして晩年に至り、様式の「引き寄せ」は、著しい域に達する。「ロの字型」平面、ジャイアント・オーダーといった「様式」的語彙を用いながら、それら本来のルールを逸脱した表現手法を佐藤は試みた。庁舎建築のような大建築においてさえも、彼は俯瞰的な「様式」よりも、「生活」からの視線を重視するに至るのである。それは、「西洋建築様式」への憧憬に端緒を持つ自己の建築家としての人生を自覚しつつ、「様式」そのものを自ら解体しようという強い意志の表象であったといえる。佐藤功一の建築観の変遷は、以上のような「様式」に対する「依拠」、「引き寄せ」、そして「解体」の過程として捉えることができる。

第3章「都市への視線」では、日比谷公会堂（昭和4）の設計変更、早稲田大学大隈講堂（同2）、および旧早稲田大学出版事務棟（同）の3作品を事例とし、佐藤功一の「建築—都市」観の特質を明らかにした。当初コンペであった日比谷公会堂の実施案は、佐藤功一の一等入選案と大きく異なるものとなった。その理由は、水平性の強い勧業銀行を対面道路の突き当たりを持つ日比谷公会堂の設計に当たり、佐藤がそれとは対照的なゴシックの垂直的造形を投じ、両者のもたらすダイナミックな視覚効果を意図したからである。つまり、日比谷公会堂の意匠変更は、佐藤功一の内部で萌芽していた「都市美観」への志向が、震災を契機として実際に具現化されていくことを示す事例の一つであると捉えることができるのである。なお、ここに示されているような交差点形状と都市美の連関については、レーモンド・アンウィンの都市論が大きく影響したものと思われる。

一方、大隈講堂と早大出版部は、細部の意匠や素材感に連続性をもたせながら、積極的に様式や高さなどに変化を与えることにより、両者が醸成する美観、ゴシックの塔をもった高い大隈講堂と低層の早大出版部との対比を企図したものと考

えられる。つまり、複数建築間における「都市美」を志向・実践したものとして、日比谷公会堂の事例と同一線上に捉えられると同時に、大隈講堂単体で表現したく高ー低の構成を、複数の建物がつくりだす風景に転移したものとも考えられる。以上、佐藤功一の「建築ー都市」観の特質をまとめると、1) 都市の美観を俯瞰的な総合美でなく、路上を歩く歩行者からの視点による美の「連景」(＝シーケンス)として捉えたこと、2) 様式・形態・高さなどの統一よりも、むしろ異質な形態の併存がもたらす動的な都市美に着目したこと、3) レーモンド・アンウィンの都市論に影響を受けつつ、自身が設計する建築によって、「建築ー都市」美の可能性を実践的に探究したことの3点である。大正後期頃になると、それまでの大規模プロジェクトとしての「都市計画」から、個々の建築の総合体として都市を捉える「都市美」の探究が行われるようになる。そうしたなか、佐藤功一の都市美への視線の特質は、日本の建築家にとっての、明治期の俯瞰的(スタティック)な都市認識から、路上からの視点による、ダイナミックな都市認識への転換を象徴するものであった。

第4章「佐藤功一の影響」ではまず、今和次郎、佐藤武夫の2名に与えた佐藤功一の影響について具体的に論じた。佐藤功一の引導により「舞台装置」に関わった今和次郎は、「建築は人生の舞台装置」という考えのもとに、考現学からさらに住生活や民家の研究に新しい視点と方法を獲得していく。また佐藤功一から引き継がれた住生活への視線は、山本拙郎、細井辰雄、河合清、遠藤健三といった早大出身の「住宅作家」へと強い影響を与えた。一方、同じく舞台への憧憬に端を発した佐藤武夫の視線は、明治末から昭和初期にかけての演劇運動と深く関連しながら、須田敦夫とともに手がけた劇場史研究、そして建築音響学およびオーディトリウム設計へと業績を上げていく。佐藤武夫の音響学の特質として顕著なのは、「鑑賞者」としての視点に立脚していることであり、それは「生活者」からの視点で住宅、建築、そして都市美を捉えようとした佐藤功一の「建築ー都市」観と平行であった。

そして、佐藤功一の「建築ー都市」観の影響は、本部、戸山、所沢という早稲田の3キャンパスの計画にも強い影響を与えた。佐藤功一の「連景の思想」は、本部キャンパスの「都市的風景」の骨格となっているのが明白であるが、とくに重要なのは今井兼次設計の旧図書館(大正14)であり、この建築で実践されている主体の動きと絵画作品の継時的・空間的連関性は、佐藤の「連景の思想」を建築単体で表現したものと捉えることができる。さらに、戸山キャンパス、所沢キャンパスにおける渦を巻くような全体計画に沿って展開される継時的体験も同様であり、佐藤功一の「建築ー都市」観＝「連景の思想」が、「早稲田建築」の血脈として継承されていることを示している。

以上をまとめ、結論とした。

# 研 究 業 績

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
論 文○	早稲田大学大隈記念大講堂と旧早稲田大学出版部事務棟との連関性に関する考察－佐藤功一の「建築－都市」観に関する研究・2、日本建築学会計画系論文集 No.584、2004年10月、米山勇
論 文○	東京市政調査会館及東京市公会堂の設計変更に関する考察－佐藤功一の「建築－都市」観に関する研究・1、日本建築学会計画系論文集 No.566、2003年4月、米山勇
論 文	早稲田大学西早稲田キャンパスの景観形成過程に関する研究－佐藤功一の都市美論と営繕組織の活動を通して、日本建築学会計画系論文集 No.519、1999年5月、赤尾光司、後藤春彦、三宅諭、米山勇
論 文○	江戸湯屋建築の復元的研究、東京都江戸東京博物館研究報告第4号、1999年2月、米山勇
論 文○	東京市政調査会館及東京市公会堂の設計変更をめぐって－明治末から昭和初期にかけての演劇運動と建築に関する考察・2、（1996年度）日本建築学会関東支部研究選集、1998年8月、米山勇
論 文	佐藤功一の都市美論から見た西早稲田キャンパス空間構成－大学キャンパスに関する研究・1、（1996年度）日本建築学会関東支部研究選集、1998年8月、赤尾光司、後藤春彦、三宅諭、米山勇
論 文○	建築家・佐藤功一と都市への視線、あるいは近代の視線、東京都江戸東京博物館研究報第2号、1997年3月、米山勇
論 文○	大越町娯楽場と大正後期の今和次郎の活動について－明治末から昭和初期にかけての演劇運動と建築に関する考察・1、日本建築学会計画系論文集 No.485、1996年7月、米山勇、川添登、中川武
講 演○	栃木県庁舎の設計変更について 新発見資料に基づく栃木県庁舎と佐藤功一に関する研究・1、日本建築学会大会、2004年8月
講 演	旧早稲田大学出版部倉庫にみる中村式鉄筋コンクリート建築、同上、佐々木昌孝、中川武、米山勇、山崎幹泰
講 演○	佐藤功一と今和次郎－都市・生活への視線、日本生活学会今和次郎研究会、2004年6月
講 演○	栃木県庁舎の設計変更について 新発見資料に基づく栃木県庁舎と佐藤功一に関する研究・1、日本建築学会大会、2004年8月
講 演○	東京・「建築－都市」の相貌、日本歴史文化学会、2002年5月
講 演○	前川國男邸の開口部をめぐって、日本建築学会大会、2001年9月
講 演○	湯屋の復元、日本建築学会大会、1999年9月
講 演○	東京市政調査会館及東京市公会堂の意匠変更が意味するものについて、日本建築学会大会、1997年9月
講 演	白鳥義三郎・山本拙郎の住宅論争について、同上、見城美枝子、川添登、中川武、米山勇
講 演○	東京市政調査会館及東京市公会堂の設計変更をめぐって、日本建築学会関東支部研究発表会、1997年3月
講 演	都市と劇場の相関関係から捉えた「浅草六区」の誕生－明治末から昭和初期にかけての演劇運動と建築に関する考察・3、同上、渡辺信也、中川武、米山勇
講 演	都市と劇場の相関関係から捉えた「浅草六区」の隆盛と衰退－明治末から昭和初期にかけての演劇運動と建築に関する考察・4、同上、渡辺信也、中川武、米山勇
講 演	旧帝国劇場の復元的考察－明治末から昭和初期にかけての演劇運動と建築に関する考察・5、同上、小林徹也、中川武、米山勇
講 演○	創設期から昭和初期にかけての早稲田大学建築学科卒業生に関する資料について、日本建築学会大会、1995年8月

# 研 究 業 績

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
講 演	戦前の住宅改良に伴う動線研究および生活時間研究について、同上、見城美枝子、川添登、中川武、米山勇
講 演	栃木県庁舎と佐藤功一の近代的視線、同上、鈴木裕士、川添登、中川武、米山勇
講 演	今和次郎設計の大越娯楽場について、同上、岸未希亜、川添登、中川武、米山勇
講 演	雪国の民家と考現学ー今和次郎と純三の仕事ー、同上、川添登、中川武、米山勇
講 演○	日本近代建築史における早稲田建築の系譜・演劇運動からオーディトリウムへ、日本建築学会関東支部研究発表会、1995年3月
講 演○	佐藤功一設計の反町茂作邸について、日本建築学会大会、1994年9月
講 演	反町茂作邸にみられる佐藤功一の住宅観、同上、市川陽子、川添登、中川武
講 演	今和次郎の銀座調査・1、同上、川添登、中川武、昼田好行、米山勇
講 演	今和次郎の銀座調査・2、同上、昼田好行、川添登、中川武、米山勇
講 演	指導卒業論文にみられる今和次郎の民家教育観、同上、岸未希亜、川添登、中川武、米山勇
講 演○	早稲田大学恩賜記念館の研究、日本建築学会大会、1994年9月
講 演○	旧早稲田大学出版部事務棟にみられる佐藤功一の建築理念、日本建築学会大会、1992年8月
講 演○	旧早稲田大学出版部事務棟にみられる佐藤功一の建築理念、日本建築学会大会、1992年8月
講 演○	旧陸軍大久保実弾射撃練習場遺構について、日本建築学会大会、1991年9月
	他、講演・シンポジウム、見学会、テレビ・ラジオ出演 計106件。
著 書	痛快！ケンチク雑学王（共著）、彰国社、2004年
著 書	〔販売用番組〕建築の世紀 モダン東京のおもかげ 第1回～第10回（監修＋出演）、製作：TOKYO MXTV、配給：放送番組センター、2004年
著 書	〔CD-ROM〕都内23区の近代建築データベース（監修）、エコプラン、2003年
著 書	大江戸透絵図（共著）、江戸開府400年記念事業実行委員会、2003年
著 書	建築MAP横浜・鎌倉（監修）、TOTOT出版、2002年
著 書	東京ー建築・都市伝説 Tokyo Eleven Paradise』（監修）、TOTOT出版、2001年
著 書	東京の近代建築（共著）、地人書館、2000年
著 書	20世紀建築研究（共著）、I N A X出版、1998年
著 書	建築ガイド・都市ガイドー東京圏ー』（共著）、彰国社、1998年
著 書	建築MAP京都（監修）、TOTOT出版、1998年
著 書	ロマンティストたちの家ー佐藤武夫と佐藤総合計画の半世紀（共著）、日刊建設通信新聞社、1997年
著 書	現代建築の軌跡1925ー1995』（共著）、新建築社、1995年
著 書	新潟県の近代建築』（共著）、新潟日報事業社、1994年
調査報告書	早稲田大学文学部大講堂解体調査報告書、早稲田大学、1996年3月
調査報告書	福島県田村郡滝根町建物調査報告7、滝根町教育委員会、1993年3月
調査報告書	墨田区民家建造物悉皆調査報告書、墨田区教育委員会、1991年9月
調査報告書	旧早稲田大学出版部事務棟調査報告書、早稲田大学、1991年7月
調査報告書	早稲田大学大隈庭園内倉庫調査報告書、早稲田大学、1991年4月

# 研 究 業 績

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
評 論	〔隔月連載〕名住宅ダブルクリック、新建築住宅特集、2004年2月～連載中
評 論	〔対談〕植田実×米山勇 世界の集合住宅から考える「ヴィンテージ」の真価とは、都心に住む、リクルート、2004年10月
評 論	〔インタビュー〕ニッポン集合住宅年代記、都心に住む、2004年9月
評 論	いくつもの環が重なり合う場、photon issue.4、大伸社、2004年5月
評 論	江戸湯屋文書、讀売新聞、2004年4月2日（金）都内版朝刊
評 論	ヨコハマ建築散歩－昭和モダン建築案内、東京人、都市出版、2004年6月
評 論	中野区、東京人、2004年4月
評 論	〔連載〕TOKYO 建築アカデミー、都心に住む、2003年～2004年（全6回）
評 論	超高層化の時代と「住宅の未来」、自警、自警会、2004年12月
評 論	〔インタビュー〕これからの集合住宅のスタンダード、東京カレンダー、アクセス・パブリッシング、2003年12月
評 論	建築見て歩きガイド、東京人、2003年11月
評 論	〔インタビュー〕湾岸を考える、都心に住む、2003年8月
評 論	巨匠へのオマージュ 作品研究のための建築模型、東京人、2003年7月
評 論	明治、大正、昭和の町並みにタイムスリップ、東京人、2003年7月
評 論	〔インタビュー〕有識者が語る賃貸派のススメ、住宅情報賃貸版首都圏、リクルート、2003年8月
評 論	日本の近代建築と庭園、緑と水のひろば、東京都公園協会、2003年6月
評 論	巨匠12人の足跡、東京人、2003年4月
評 論	たてものの保存再生物語、東京人、2003年3月
評 論	〔書評対談〕佐野正一著『建築家三代』（×佐野正一）、建築画報、2003年3月
評 論	〔インタビュー〕集合住宅の過去、現在、ブルータス512号、2002年11月
評 論	失われた昭和歴史建築、東京人、2002年9月
評 論	ライト・シャンパン・W杯の関係性、日経アーキテクチュア、2002年7月22日
評 論	〔インタビュー〕「鹿鳴館」復元、再現日本史、講談社、2002年6月25日
評 論	邸宅跡の美しい庭を訪ねる、東京人、2002年6月
評 論	米山勇の「定番！時代別セレクション」、LIVING DESIGN、リビングデザインセンター、2002年4月
評 論	震災復興期の東京、浅岡ルリ子主演「憎いあんちくしょう」（2002年2月1日～26日、帝国劇場）プログラム、東宝
評 論	〔インタビュー〕東京建築展を企画した建築史家、日経アーキテクチュア、2002年1月21日
評 論	〔対談〕「東京建築展」に行こう！（×見城美枝子）、東京人、2002年1月
評 論	〔座談会司会〕21世紀の防水はどう進化してゆくか、防水ジャーナル、2001年6月
評 論	独白（モノログ）としての素描－佐藤功一、建築雑誌、2001年6月
評 論	〔連載〕丸の内－地歴をめぐる、ザ・パレス、パレスホテル、2001年3月～9月
評 論	建築に魅せられた男の挑戦状－「黒川紀章回顧展」レポート、新建築、2000年10月
評 論	江戸東京博物館に集合住宅の原点を見に行く、東京人、2000年9月
評 論	20世紀東京の「建築－都市」をどう展示するか～「東京建築展」にむけて～、新都市第54巻第5号、都市計画協会、2000年5月
評 論	継承される「折衷」精神の諸相、新建築2000年3月臨時増刊 世紀をつなぐ
評 論	微妙な緊張感、建築雑誌、1999年3月
評 論	近代建築保存のノウハウ、東京人、1998年4月
評 論	〔書評〕内山淳一著『江戸の好奇心－美術と科学の出会い』、SCIaS、1997年3月
評 論	博物館の建築史学：その可能性と役割、建築雑誌、1996年10月
評 論	エコ・メタボリズムへー菊竹清訓インタビュー、新建築、1996年1月
評 論	〔書評〕石田潤一郎著『都道府県庁舎 その建築史的考察』、建築史学、1994年9月
評 論	乃木坂の潜水艦 菊竹清訓展レポート、新建築、1993年6月
評 論	他、雑誌等掲載評論 計14篇。

